

Title	青木徹二著 手形法論
Sub Title	
Author	西村, 富三郎
Publisher	三田学会
Publication year	1911
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.5, No.2 (1911. 2) ,p.208(90)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新着紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110215-0091">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110215-0091</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

90 模の穀類混同保管せられつゝあるを見れば同種返還による寄託も亦保管と稱し得べきか記して高教を待つ(二月稿)

### 新 著 紹 介

岡村玄治著 法之真髓 嚴松堂發行

題して法之真髓と云ふ法の根本觀念に就き研究を試みたるものにして先づ宇宙人生を論じ法權利義務法人及び國家の意義に説き及べり著者は法を以て人道なりとし法と道徳との差別を認めず人の踐む可き道は時と處によりて變遷するものにして法は自然に存在すと雖も所謂自然法説の如く一定不易の法則にあらずとの斷定を以て議論の根底となしたり評者はもとより斯の如き大問題が一小冊子に於て論じ盡され得べきを信する者にはあざざれども著者の所論は餘りに無雜作にして且つ獨斷的なり、自然法に關する法則は眞に古來の大問題にして容易に其の是非を斷定し得ずと雖も著者の

説くが如くんば以て人定法説を斥くること甚だ難きを感じ、然し現今法學を修むる者は一般に現行法の解釋にのみ汲々として根本法理の研究に至りては聊か物足らぬ心地する折柄本書に接するを得たるは大に愉快に感ずる所なり評者は他日著者が更に進んで深淵精緻なる議論を公にせられんことを望むものなり。(西村富三郎)

青木徹二著 手形法論 第四版有斐閣發行

本書は立論の精銳にして行文の簡明なるを以て大に世に歡迎せられつゝある青木博士の商法全書の第四篇にして今度根本的に増訂せられて約七百頁の大冊となりたるものなり前版に於て深遠なる理論よりも寧ろ主として判例の批評に意を用ゐられたる様なるが本書に於ては手形に關する法理論も亦大に豊富となれり加ふるに現下の問題たる商法改正法律案をも一々引照せられたるを以て我が國に於ける手形法に關する最近の著書として學者及び實際家にとり絶好の參考者たることを紹介するものなり。(西村富三郎)

### 三田學會記事

#### 理財學會例會

去る四日午後六時より圖書館大廣間に於て例會を開けり開會の辭に次で高柳武男氏は「實證主義の哲學を論ず」の題下に該哲學の由來並に長所短所を指摘して平素瀟灑せる處を披瀝し、次に石川文吾氏は「保險事業の官營に就て」と題し先づ反對意見の根據とする官營の弊害を擧げて論評し更に官營の利益を述べ最後に官營の程度に論及して所謂小口保險營業の官營に適せる旨を説て結ばれ倉知誠夫氏は「演釋的事業と歸納的事業との差異」と題し英米兩國の事業振を精細に紹介批評せられ堀切教授の挨拶を以て閉會せり時正に十時なり。(ひら)

#### 三田文學會講演大會

同會は去る四日午後一時より義塾第三十二番講堂に於て第九回講演大會を開會したり、先づ教授川合貞一氏の「開會の辭」に次ぎ、教授永井荷風氏は「十分間なる演題の下に、日本中古以來の建築と現代の建築とを比較詳述し、明治時代を代表すべき好個の建築物なきは畢竟藝術家に熱心なきと從事の慣習に囚はれたるに外ならずと論じ、次に黒田鵬心氏は「建築美術と批評の標準」と題し建築藝術上に於ける標準に就て詳細に審美的と實用的と時代に關して批評せられ、次で教授馬場孤蝶氏は「危險なる藝術」と題し封建

時代の政略的に作られたる君臣父子の關係を其儘現代に應用強制せんとするの非を論じ、赤塚々なる人生觀を説き、教授岩村透氏は「五分間なる題の下に例の快辯を振て滔々と西洋式に模倣せんとする我國人の缺點を述べ、次に平出修氏は「危險なる思想」と題し社會主義と無政府主義とに就て充分の注意の缺ける嫌なきに非らずと自己の感想を披瀝し、最後に岩野泡鳴氏は「現代思想の傾向」と題し井上博士が學者の立場として思想の甚だ淺薄なるを痛論せられて降壇閉會したるは午後六時にして當日は聴衆堂に溢れ無慮八百人以上中に女子大學、津田英學塾及び其他の女學生凡そ二十名も見受られたり(逸甫)

#### 三田史學會例會

同會第七回例會は去月廿七日午後三時より大學部文科講堂に於て開催せられ教授田中萃一郎氏の挨拶に次ぎ會員小澤愛蘭氏は「徳川初葉に於ける我國と明及び琉球との關係」と題し徳川家康の對外政策より説起し慶長以前に於ける我と琉球との關係、慶長時代に入りて彼と明との關係、彼の我に對する來聘の怠慢、島津氏の督促、彼の倭傲、十四年の琉球征伐、其後に於ける島津氏の措置より更に其間に於て我の彼をして日支通交の復興を計らしめたる事等を詳述し其後琉球が日支兩國の王國たりしに拘はらず之に就て兩國何等の交渉衝突等の事無かりしは是れ偏に彼は名を尊び我は利を重んじたるに因るものなりと結び次に會員村田岩次郎氏は「國民の政治的心理を決定する主勢力の研究」と題し自然的(氏の